

今回の『境界を越えて』は、福嶋亮大編集長による見事な采配ぶりのもと、例年になく工夫のほどこされた号となった。専攻教員による論文寄稿と院生の研究ノート、研究交流会記録についてはこれまでと同じだが、今回はそれに加えて来年度から特任教授として着任する陣野俊史氏による寄稿と院生諸氏による書評のセクション、さらに巻頭特別企画として西谷修特任教授へのインタビューが配されており、十分に読み応えがある。

院生による書評欄は、アカデミック・ライティングの鍛錬の場であると同時に、研究ノートや論文にステップアップしていくための足慣らしになるよう意図してのことだが、たかが書評と侮るべからず。人は書くものによって決まるのではなく、読むものによって決まると言ったのはボルヘスである。読むことのなかに書くことは胚胎し、書くことのなかで読むことは生成するのであって、書評はそのふたつの位相をシームレスに行き来する絶好のチャンスと考えてほしい。たったひとつの書評をきっかけに研究論文や学問論争が生まれることも稀ではないのだ。来年度以降も書評セクションは維持される予定なので、院生諸氏は今の時期から書評にむけた読書に勤しんでおいてほしい。

西谷氏へのインタビューは、実際には倍量におよぶロングインタビューになったようで、紀要への全文掲載はとても不可能とのこと。いずれホームページなど別のかたちで公表の予定である。めくるめく博覧強記の西谷ワールドがどこまで広がっていくのか、楽しみである。

ところで、インタビューを一読して強く私の印象に残ったのは、ルネサンス期に生まれた「人間」を意味する2つのヨーロッパ語、「フマニタス」と「アントロポス」についての議論のくだりである。詳細はインタビューを参照してもらいたいが、「フマニタス」とはいわゆる「人間」を意味する言葉で人間の本来のなかりかたを指すのに対して、「アントロポス」はフマニタスによって発見された亜

種としての人間，フマニタスの外部に存在して，フマニタスによって観察され操作されうる対象としての人間のことである。いうまでもなくフマニタスが含意する人間はヨーロッパ的人間（しかもおそらくは「大人」の「男性」）を意味し，アントロポスはフマニタスの範疇に入らない外部の存在を指している。

歴史的にみると，世界的な植民地化の過程で，アントロポスは博物学的・自然誌的な観察の対象としてフマニタスによって発見されつづけた。だがそもそもフマニタスがフマニタスであるためには，アントロポスは発見されつづけなければならなかったとも言えよう。なぜならフマニタスは，アントロポスを知の対象にする行為をつうじてはじめて自己を知の主体として定位しえたからだ。

近代的な主体意識は，フマニタスによる外部＝アントロポスの発見と，その知的消費を介した「知る自己」という自己認識のなかで形成されたのである。近代的な主体意識はアントロポスを必要としていた。カント，ヘーゲル，ルソー，ロックなど，近代ヨーロッパを代表する哲学者の思索の背後に，アントロポスについての知（アンソロポロジー）が影のように貼り付いている理由はそこにある。

ところで，私がこの魅力的な概念と出逢ったのは今回が初めてではない。ラテンアメリカを代表するポストコロニアル理論家で文化人類学者でもあるウォルター・D・ミニョーロの著作*The Darker Side of Western Modernity* (2011) を読んでいたときのこと。思いがけずMr. Osamuなる人物の2006年のテキスト“Anthropos and Humanitas: Two Western Concepts of ‘Human Being’”への参照部分と出くわしたのだった。（原文はNaoki Sakai & Jon Solomon eds., *Translation, Biopolitics, Colonial Difference*, Hong Kong: Hong Kong University Press所収。）

“I Am Where I Do”というパフォーマンスな題名が冠された第2章で，ミニョーロは，ルネサンス期に生まれた帝国による世界分割の思考——カール・シュミットの「グローバルな線の思考」——の結実として，地球を一望する観察者の視点からなる世界認識が生まれたと述べ，その新たな世界認識のパラディグマティックな例をアブラハム・オルテリウスの世界地図「世界の舞台」（1570年）に見てとっている。観察者が地球の上において大西洋を中心に世界をマッピングしなおす視点は，究極の知の地上化でありながら，観察者が位置している地理的・歴史的な場のローカリティを隠すという意味で

徹底的な脱=地上化であった。この新たな視点は、空間性と時間性というくびきから首尾よく解放されたことによって普遍を纏い、その普遍性のもとに万人がひれ伏すべしとする当為を体現したのである。ミニョーロはコロンビアの思想家サンティアゴ・カストロ=ゴメスにならってこれを「認識のゼロ度」(epistemic zero point)と呼び、近代的な知の主体としてのフマニタスとイコールで結んでいる。

*Global Futures, Decolonial Options*という本書のサブタイトルからわかるように、ミニョーロは近代の知の秩序をマッピングしなおすだけでなく、知の脱植民地化にむけた未来構想を企図している。いわく、16世紀以降、フマニタスによる世界のフマニタス化が進められてきたが、その一方でアントロポスと名指された人びとの一部は、フマニタスに帰依したり同化したり、フマニタスから与えられたりするのではない仕方で自分たちの人間性^{ヒューマニテイ}を引き受け、「自分たちが思考する場所にいる」(being where they think) ことのみでフマニタス化してきた。フマニタス的な「認識のゼロ度」に知の地政学と身体政治を持ち込むことによって、アントロポスによるフマニタスのアントロポス化が目指されたというのである。ミニョーロはそこに未来にむけた可能性のひとつを見ようとしている。この点でもフマニタスの亜種であるアントロポスがフマニタスを「矯正」し、フマニタスのあり方を変えていくことを目論むオサム・ニシタニのゲリラ的な試みとミニョーロのそれとは不思議なほど重なりあう。

ふりかえれば私たちもまた人文学^{ヒューマニティーズ}を学ぶ者として、フマニタスの亜種でありながらフマニタスの領域に首を突っ込んでいる。この居心地の悪さから目を背けたり、フマニタスへの同化に精根尽くすのではなく、どうやったら「異物」をフマニタスに持ち込めるか、それを粘り強く考えることが私たちひとりひとりのこれからの課題であり、いま現在最も問われていることであろう。

2018年2月

立教比較文明学会会長

立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻主任

林 みどり